

令和 7 年度奈良市教育委員会施策評価懇談会の意見の概要	
開催日時	令和 7 年 7 月 1 8 日（金）午後 3 時から午後 5 時まで
開催場所	オンライン会議
意見等を求める内容等	・意見交換 「学校現場における生成 AI の導入状況について」 「学校給食の状況と子どもの食育について」 ・外部評価者の質問・意見への対応の確認
参 加 者	【外部評価者】橋崎 頼子 氏、上崎 哉 氏 【計 2 名】 【教 育 委 員】北谷雅人教育長、柳澤保徳委員、梅田真寿美委員 川村由加里委員、新井イスマイル委員 【計 5 名】 【事 務 局】土田教育政策課長、小林課長補佐、楠田主任【計 3 名】
開催形態	公開 （傍聴人 0 人）
担 当 課	教育委員会事務局 教育政策課
意見等の内容の取り纏め	
項目 No.1「教育委員会が管理・執行する事務」、項目 No.2「教育委員の活動」について内容確認の後、外部評価者と教育委員で意見交換を行った。 《意見を求めた内容及びそれらに対する意見等》 1. 外部評価者の質問・意見への対応の確認 項目 No.1「教育委員会が管理・執行する事務」、項目 No.2「教育委員の活動」について、質問・意見がないことを外部評価者に確認し、了承を得た。 2. 意見交換 【テーマ 1】学校現場における生成 AI の導入状況について （橋崎評価者） 生成 AI の導入状況について、上崎先生からテーマご提案の趣旨をお願いしたい。 （上崎評価者） 私自身が大学で今取り組んでいる中で関心が高いテーマである。大学では生成 AI を学生がレポート作成に活用しているが、高校生までの段階で自治体においてどのような活用がなされているのかを把握したかった。 （北谷教育長） 奈良市では学校現場において、汎用的な AI デジタルドリルを小学校 3 年生以上に対して導入している。学校が生成 AI を導入するのか、しないのかという議論ではなく、管理をしながら積極的に正しく活用する目的で、令和 7 年度の 2 学期を目途に、学校現場での生成 AI	

の活用を進めていく。

奈良市では、Google の AI ツールを全校で使える環境を整備している。教員の授業準備、書類作成等の日常業務では、すでに生成 AI の活用が始まっている。

昨年 12 月に文科省から新しいガイドラインが示されたことを受けて、AI の使い方を二つに分けて進めており、「校務利用」では、教員の授業準備や書類作成の効率化等、教員の働き方改革につなげていくものである。「教育利用」では、子どもたちが AI を、考えを深めるための有用な道具として活用し、それぞれの子どもの発達段階に応じて、慎重に取り組みたいと考えている。

国のガイドラインを踏まえて、奈良市では独自の補助資料を作成し、教員、子ども、保護者、学校のホームページ掲載用と、それぞれの立場に応じた内容で、関係者全員が AI を正しく理解し、安心して活用できるようサポートをしていきたいと考えている。

学校現場の声をよく聞きながら、段階的に進めることが大事だと考えている。校長や、教頭、現場の教員との意見交換を重ねながら、今年度内に補助資料の見直しを順次行っていく予定となっている。

また、安全性を確保しながら教育効果を高め、慎重に取り組むことは非常に大事だと考えている。個人情報や AI に入力しない、AI の回答はあくまでも参考とし、最終的な判断は必ず人間が行うということを徹底していきたい。

今後は特に学校での教育的利用について、教員の業務効率化と子どもたちの教育の質の向上の両立を目指していきたいと考えている。

（新井教育委員）

校務のサポートと教育での子どもたちの使用とにドキュメントが分かれており、それぞれの立場に立った資料が用意されており、よく整理されていると感じた。国のガイドラインも参考に、最新事例を反映した資料を作られていて、見た目も非常に分かりやすい。

不足部分としては、もっと具体的な事例を載せておくと、より分かりやすいと思った。もちろん現場では情報交換をしておられると思うが、具体例が資料としてあると、学校内で共通で使えるため、手が止まるということもなくなるのではないかなと思う。

以前、美術の授業で子どもが作った作品を写真に撮り、それを AI に評価させ、コメントを貰うというデモを見たが、AI のコメントは客観的で、基本的にすごくポジティブなことを言ってくれるので、子どもが嬉しくなるのが想像できる事例だった。事務関係では、働き方改革の上で、保護者対応が大きな負担になっていると聞くが、電話だとすぐに対応しなければならないが、文面の対応であれば AI に相談しながら検討することも考えられる。また、最近の通知表は所見欄が空欄になっている。私の子どもの頃は所見欄がびっしりと書かれていて、今読むと過去を思い出すことができよかったなと思う。子どもの行動記録を教員がメモをし、それを AI に「まとめて所見に何文字で書いて」と指示する。そのような使い方には応用できるのではないかなと考えている。そのような具体的な事例が色々とわかると思う。

（橋崎評価者）

所見欄を書くのは時間がかかり、特に若い先生はどうしようかと悩むところかなと思うが、うまく AI を活用しながら取り組み、活用事例として共有していくと良いのではという提案をいただいた。

(川村教育委員)

子どもは新しいことを大人より早く吸収して、どんどん進んでいく。使って良いもの、悪いもの、その線引きを整理して、ここに具体例を提示しても良いのではないかと思った。

例えば、著作権を侵害したらどういうことになるのか、悪いことをすれば人を傷つけてしまったり、警察に捕まったりするとか、そういったことをもう少しはっきりした言葉で伝える資料が必要ではないかと思う。

具体例を示し、子どもたちが具体的にイメージでき、やってはいけないことを、最初の段階で丁寧に伝えていくことも必要ではないかと感じた。

(橋崎評価者)

AI を使ったときに、どういうネガティブな事が起こり得るかも具体例を示して伝える必要があるのではないかという意見をいただいた。

(梅田教育委員)

奈良市教育委員会の中に「教育 DX 推進課」が位置付けられているということが、奈良市の子どもたちの生成 AI 活用に大きな推進力をもたらしめていると思う。核になってリードしていくところがない場合、それぞれの学校ごとに任せられ、全体としての方向性が定まらないことも起こり得ると思う。

大学の方ではすでに AI を様々な形で活用しているというお話があったが、児童生徒に対してそこに至るまでの積み重ねを考えたものができあがるまでには至っていないと思う。

生成 AI について具体的に、どのような活用が適切かということろまで至るには、まだまだ積み重ねが必要なのではないかと感じている。

(柳澤教育委員)

保護者の方へメッセージがどう伝わるかが大事だと思う。今まで家庭の中で情報機器をどう使うかということは学校ではやってこなかった。それは、家庭の方が進んでいたのでもう今更何もう言うこともなかった。生成 AI については、家庭と学校がほぼ同じスタートラインにあるはずなので、ここは教育委員会、学校、保護者、地域との連携を、生成 AI の活用についてどう持っていくかというところは、しっかり押さえておいたほうが良いのではないかと思う。生成 AI を避けようということではなく、正面から向き合うべきで、そのところは単に学校だけの視野にはとどまらないように、教育委員会でしっかり論点整理をされたら良いと思う。これまでとは状況が変わったのではないかと思う。

(橋崎評価者)

学校にとどまらないこと、判断力、活用力ということも含めて、教師がどんなふうに知識とか教える内容と向き合っていくかを考えさせられた。

(上崎評価者)

大学では、学生が生成 AI を使用することを前提として対応しなければいけない状況になってきている。お話にもあったが、家庭ではすでに AI を使用しているので、学校の方でどこまでコントロールができるのか、難しい状況も起こり得るなということを感じた。私は法学部の教員なので、学生にはしっかりと本や文献を読んでもらいたいと思うが、しっかり最初から最後までは読んでくれない現状がある。最近は、各自重要なところを 10 ヶ所程度引用し、そこをメモの形で抜き出して、ワードへ入力するように指示をしている。その上で抜き

出した部分を踏まえて生成 AI に、例えば「300 文字で要約を作成しなさい」という形で課題を出すと、しっかり重要な箇所を抽出してきた学生は、生成される要約もかなり優れているのに対し、重要なポイントを見落としている学生の場合は、生成される要約も質が低いといったことを実際に経験している。まだ手探りのところはあるが、生徒たち、子どもたちの能力を伸ばす方向で、いろんな活用の仕方をぜひ模索していただいたい。

【テーマ 2】学校給食の状況と子どもの食育について

（橋崎評価者）

学校給食の無償化が議論されているが、学校給食には目的として子どもの貧困への対応や食習慣、食文化、食に対する知識のような、食育の側面があると思う。それについて奈良市の状況や課題、また無償化の流れの中で今後の方針など、意見交換させていただければと思う。

（北谷教育長）

奈良市では小学校 42 校と中学校 21 校で、1 日約 2 万 2000 食を提供している。

令和 6 年度 2 学期から、奈良市の給食費は小学校が 292 円、中学校は 343 円に改定した。令和 7 年度については、改定による増額部分は市が負担をし、保護者の追加負担をなくしている。また、中学校は物価高騰対応の国の補助金を利用し、令和 7 年度については給食費を無償としている。平成 30 年度から、毎月「古都ならの日」「食育の日」の取組を行い、食育の観点から奈良の地産地消の食材に触れるなど、工夫をしている。

令和 4 年度からは、日本各地の郷土料理も紹介、提供している。学校給食での地産地消を進めるために、令和 6 年度は奈良市産の青ネギを月 2 回使用している。米飯の提供量は、令和 5 年度までは小学校において 1 から 3 年生、4 から 6 年生の二段階で米飯を提供していたが、令和 6 年度からは、低、中、高学年の 3 段階でより発達段階に応じて、適切な量を提供できるようにしている。

自校炊飯ができない学校については、加工賃を削減するためにバッカン方式を採用している。バッカン方式は、子ども自身が適量を入れられることで、残食を減らすという意味でも、うまくいっていると思う。

給食用の米は奈良県学校給食会を通じて奈良市産米「新米 1 等ヒノヒカリ」購入していたが、物価高騰のため、令和 6 年 11 月より奈良市産米「新米 2 等ヒノヒカリ」に変更しているものの、引き続き奈良市産米を使用することで、地産地消を継続している。また、減農薬米を使用して、子どもたちに上質の米を提供している。

令和 6 年度からは牛乳パックについて、企業側から順次ストローを使用せずに飲む容器に変更があり、本市においてもプラスチックごみを減らす SDGs の観点で、ストローなしで飲む取組を進めている。個別の対応が必要な子どもについてはストローを提供するなどしている。

食に関する指導や給食指導衛生管理、指導助言を行うために、特任指導主事が各小学校を訪問している。県費の栄養教諭、栄養職員 22 名が学校の規模によって配置されており、学校における食育推進のために、食に関する指導プログラムを作成して取組を行っている。食育・給食については、ホームページで保護者にわかりやすく、子どもたちが楽しみにしながらどのような給食を取っているのかわかるように、順次紹介できるように工夫をしている。

(橋崎評価者)

物価高騰の中でも、産地、提供方法を変えながら、給食を提供していただいているということや、食育のこともお話しいただいた。

(川村教育委員)

食育というのは、特に小学生においては家庭環境の影響が大きい。

食器の持ち方、食事を摂る姿勢が身についているかは大切だと思う。そして、家ではなかなか食べられないものが学校で出てきて、それが食べられるようになって、好きになって、食べられるものが増えていくという面から、また貧困対策の面からも、給食は保護者にとって、とても大きな意味を持っている。

学校では、給食を作ってくれる人への感謝の気持ち、栄養士、調理師のほかにも、食材を運ぶ方、食材を作る方、そういう方達への感謝、残さず食べること、食に関してよく関心を持つ、そして、栄養価のこと、体をつくるのに必要なことだということも、小・中学校を通して学んでいってほしいと思っている。

中学校では食育と教科を融合して学びにつなげていくことができるのではないと思う。小学校では生活環境、家庭環境が大きく左右するが、その中でも好き嫌いをなくして食べていけるような環境づくり、しっかり栄養価のあるものの提供は大前提であり、そこから先、中学校につながるところで、食に対しての意識、個人個人が親の指導ではなく、自分から食べることの大切さを学んでほしいと思う。

(橋崎評価者)

基本のところを押さえつつ、その先の感謝や残さず食べるという意識、食べることの大切さといった意識のことをお話しいただいた。

(梅田教育委員)

学校においては、学校給食法や学習指導要領で、それぞれの教育活動のどのような点において食に関わり、それぞれの学年の子どもたちにどのような指導を計画的に行っていくのか、各学校において食に関する指導の全体計画を立てることが求められている。給食における様々な食育指導、食材についての指導等だけでなく、例えば、小学校であれば生活科、家庭科、理科、社会など、様々な教科との結びつきが、計画の中で位置づけることによって見えてくと思う。中学校においても、同様に様々な教科や学校における行事などの活動も含めて活用がなされていると思う。

子ども自身の受け止めを考えると、小学校の1、2年生の低学年の間は食べているものがどんなものなのかを知らず、イメージができないことが考えられる。そこに対して、「食育の日」、「古都ならの日」のような、それぞれの食材について触れられる機会の積み重ねによって、子どもたちの中には、自分の住んでいる地域と、地域における食材と自分の食べているものがどのようなものであるのか、地域とのつながりや、地域の中で育っている自分自身というものも感じられ、栄養のことや自分の体をしっかり元気に維持していくということの意味を考えていくことにもつながっていくと思う。

それを支えていくために、無償化や様々な食材を検討していく必要があるのだと思う。

こういった積み重ねが行われていくことによって、奈良市における食育というものを通して自分自身の健康を維持していくベースを培っていくことにつなげていってもらいたいと思う。

(橋崎評価者)

地域の中で食が作られ、それを食べているんだという、「つながりの理解」というのはすごく重要だと思う。お米がスーパーに並んでいるだけではない、「本当に奈良の中で育っているんだ」というような実感というところかと思う。なるほどと思い、聞かせていただいた。

(新井教育委員)

食育については、誰が担当しながら現場でやるのかという心配はある。小学校だと担任の先生の仕事として、食育の重要性が上げられてくると、その調整の中で負担になってしまうのではないかと。栄養教諭等が回られているという話があったので、うまく教室外のところから来ていただく方の助けを借りながらやる分には良いと思うが、一度聞いたことがあるのは、給食の時間中に担任の先生が常に教室にいないといけないという状態があるようで、これは給食の献立の解説をされているわけではなく、アレルギーのあるお子さんが間違っアレルギーの食材を食べないかの確認のため、ずっと注視されているというようなことだったと思うが、そういう役割を担任の先生に持たせてしまうと、担任の先生はお昼休みがない状態になるのは、少し不憫だなと思う。

もしも探究の時間を使ってうまく献立と社会や理科の内容等に接続していかなければならないとなると、やはり担任の先生の負担になると思う。誰がどういう形で協力されているのか、そういったことが見えてくると良いと思う。

例えば、栄養教諭が来るにあたっても、来週は理科、社会で漁業を習う予定だから、魚に関する話をした方が良さだろうとか、上手く元々の授業との接続をある程度手がかりがあった上で給食のメニューや食育の内容を組み立てられると、子どもにとっては、すごくタイムリーな話に聞こえて良いのではないかなと思うので、学習状況であるとか、担任の先生はこういうことに興味があつて、そこに対して食育のメニューを入れるならばこういうものが良いのではないかと等、うまく探せる仕組みがあると良いと思った。

担任の先生の負担が増えないような工夫があつて、さらに上手く情報交換をする仕組みがあれば、教育の質自体も上がり、二重で効果が出る可能性はあるだろうと思っている。

情報発信をしていると、色んな方に見ていただけると思うので、献立を公開したり、その献立を作っている思いなどを給食日より等で公開したりしているというのもすごく良いと思う。家庭でそれを読むと、メニューを取り入れたりアレンジを考えたりできるお母さん、お父さんもいると思う。なるべくそういう情報が出てくると良いと思った。

(柳澤教育委員)

給食というものは、地産地消も含めて、地域に密接しているところがある。そこをもう少し、社会の授業であるとか、総合的な学習の時間等でしっかりと、年に1、2回はっきり見える形で取り上げると良いのではないかと。その時、問題となるのが「時間の無さ」である。例えば、学校での年間の食の教育は今、縦割りの方針がずっとあると思うが、そこを横断的に何かフレキシブルに考えるような知恵の出し方があると良いと思う。

また、給食費の公費負担をどうするのかを早く決着していただければと思う。政治的な意味合いも含めて、公費負担ができる地方自治体と難しい自治体とがあつて、国からのサポートがあればできるという状況。やはりここは、全国小学校校長会等の様々なところで、方針を出すように要望すれば良いと思う。お金がかかり、色んな考え方があるので、余裕のあるところから取れば良いんじゃないかという考え方もある。全員を無償にするのか、部分的無償なのか、考え方については、やろうと思えばすぐ議論できると思う。そうしないと、毎年、教育委員会の事務局が来年度予算について方針が決められないのは好ましくなく、それが本

来の仕事ではないような気もするので、どういうプロセスで実現するのか、予算的などところで議会も関係してくるが、はっきり方針を立てていくと良いのではないか。奈良市単独というのは無理かもしれないが、どう考えていくかは整理していただけたらと思った。

（橋崎評価者）

給食という機会を用いながら、教育をさらに深めていく機会にしていこうと、そのための公費負担をどのように考えていくのかというようなこと、また教育委員会も含めてご検討いただけたらと思う。

（上崎評価者）

学校の現場で様々な取組をされているということで、感心しているところ。

特に、生徒が提案したメニューが実際に給食の献立に反映されるという、ひじきカレーの取組などは、これに関わった生徒は心に残り、将来的にも思い出としてしっかり残るので、素晴らしい取組だと思う。こういった類似の取組が今後にもなされるということ、ぜひ期待したいと思う。

評価シート「（３）教育委員会が管理・執行を教育長に委任する事務」について、外部評価者から事前に質問意見のあった評価シート及び評価シート全体に対する意見聴取を行った。

施策評価全体について

（橋崎評価者）

引き続き、すごく丁寧に取り組んでいただいていると思う。公教育を担う教育委員会としての取組ということで、特に支援が必要な子どもたちへのきめ細かな取組というところはすごく良く取り組んでいただいているなと思いつつ、毎回読ませていただいている。

ただ、評価が課によって厳しさが違うのではないかと感じる。しっかり取り組んでいただいているからこそ、目に見える形で成果が出ているのだというのが見えたら良いとは思いますが、もちろん客観的な数字で取り組んでいただいていると思うが、やや目標を超えて厳しめに評価されているところもあるのかなという印象を持った。

（上崎評価者）

教育委員会の業務が多岐に及んでいるということ、改めて認識した。やはり奈良市ということで、文化財の保護継承活用等、様々な取り組んでおられるということ、大変勉強になった。

今日の議題でもあった食育も含めて、現在の教育の現場で取り組まれていることを色々と勉強させてもらった。

ただ KPI 評価に関しては、改善の余地があると感じた。他の評価委員会等を見ても、やはり KPI をベースに、かなり客観的な評価をされているケースが多いと思うので、KPI を設けるのであれば、やっぱりそれを第一にするのが良いのかなと思う。

KPI の評価が難しいのであれば、KPI を使わずに評価をする等、また来年度に向けて検討をお願いできればと思う。

項目 No. 4 「ICT を活用した学び」

4-2 GIGA スクール構想実現事業

(橋崎評価者)

専門用語を使用する事業であり、そういった言葉を限られた範囲で短い文言で書いていただくのは難しいかとは思いますが、ぜひ、今後もわかりやすい表記を心がけてもらいたい。

項目 No. 5 「探究学習」

5-1 高等学校教育振興事務経費 5-2 スーパースマートスクール事業

5-3 市立小・中学校での取組

(上崎評価者)

すばらしい取組をされていると見受けられる。現状の「C 評価」を「B 評価」や「A 評価」に上げるためのビジョンを持っており、そういったところを目指しているのであれば、目標あるいは目的の欄のところで、そこまで目指しているということも明確にしても良いのではないかと思う。

No. 13 「体力の向上と健康教育」

13-1 部活動指導員

(橋崎評価者)

学校部活動の状況については、関心が高い項目であると思うので、実態としてどれぐらい今進んだのか、取組の状況がよくわかるような記載をしていただければと思う。

項目 No. 21、「虐待の早期発見」

21-1 生徒指導推進経費

(橋崎評価者)

ヤングケアラーについてのアンケート結果について、小学校 5、6 年で 19.6% というのは高いなという印象を持った。アンケートを生かして取組を進めてほしい。

項目 No. 25 「人権教育」

KPI 全ての教職員が人権教育推進計画の策定及び取組の評価に何らかの形で参加する体制がとられている学校数

(上崎評価者)

仮に 65 校全てで体制がとられたとすれば、その後の目標としてはそれを維持していくということになるのか、あるいはまた新しい目標、KPI を設定されるのかについては、今後検討していただけると望ましいと思う。